

国立国語研究所学術情報リポジトリ

国立国語研究所の鶴岡調査の位置づけ

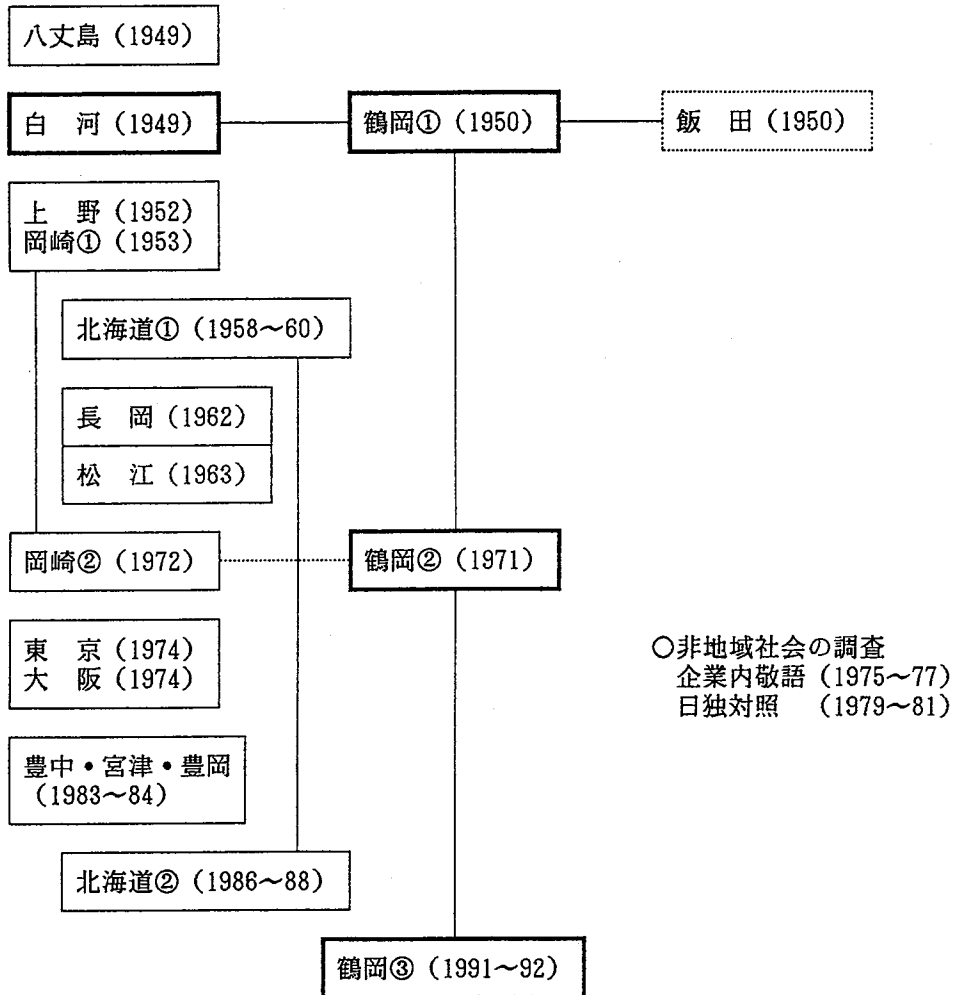
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江川, 清 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002910

国立国語研究所の鶴岡調査の位置づけ

江川 清（国立国語研究所員）

1. 国語研の社会言語学的調査研究

国立国語研究所（以下「国語研」）では、1948年12月の創立以来、数多くの言語生活・社会言語学的調査研究に取り組んできた。そのうちの地域社会を対象とした大規模調査研究を一覧すると以下のようなになる（括弧内の数字は当該年度）。



2. 鶴岡調査の状況

前ページの図に示したように、国語研では山形県鶴岡市で1950年、1971年、1991年と約20年間隔で3次の調査を行ってきている。3次の調査とも主題は共通語化であるが、細部の目的は当然ながら時どきで若干異なっている。以下、第1次調査から順にやや詳しく記しておく。

2. 1. 第1次調査の背景

2. 1. 1. 白河調査

国語研が創設直後に手掛けた本格的な言語生活の実態調査は、1949年秋から冬にかけての福島県白河市を中心とする調査であった（同年春の八丈島の言語調査は方法論を確立するためという性格が強い）。この調査は統計数理研究所および民俗学研究所と共同で文部省科学科学試験研究費補助金（「白河市および附近の農村における言語生活調査」）の交付を受けて行われたものである。

この調査の目的等について、国語研報告2（『言語生活の実態——白河市および附近の農村における』、秀英出版、1951年）の「前書き」から一部抜粋しておく。

この調査の目的は、国民の社会生活の合理化、能率化をはばむ言語生活上の諸条件を明らかにすることである。／そこで、国民の言語生活の実態を知ることが目標として、そのために特定地点を選び、そこに行われる言語生活の全体の様子を、社会環境との関連において捕えることとした。／特定地点として選んだのは、福島県白河市とその附近の金山村、五箇村（いずれも西白河郡である。白河市を選んだ理由は、第1に、わが国に最も普通に見られる、農村地帯の一中心をなす小都市であること、第2に、人口があまり多くも少なくもない適当な大きさであること、第3に、その方言が調査員にとって了解できないほど変っていないが、共通語とは容易に区別しうる言語であること、および、第4に、東京からの往復が比較的便利で、しかも、現地の特別の協力が期待されることなどである。／（中略）昭和24年（1949）の結果は、昭和25年（1950）以後別の地点で同じ項目について同じ方法で調査される結果と比較されるであろう。また、白河市において数年後同じ項目について同じ方法で調査されることによって、言語変化の実状が明らかにされるであろう。

なお、この調査は大別して下記の6種類の調査群からなっている。

- ①共通語を話す度合いと過程との調査
- ②言語能力と言語生活との調査
- ③言語生活の24時間調査
- ④疎開児童・生徒の言語の調査
- ⑤言語的背景の調査
- ⑥社会的背景の調査

2. 1. 2. 鶴岡調査

この調査は、前年の白河調査の結果、とりわけ①の共通語化調査の結果が、白河以外の地域でもあてはまるか否かを比較検証するためのものである。秋田・山形両県下の小都市および町のいくつかの候補地域の中から山形県鶴岡市とその周辺の村として東田川郡山添村が選ばれた。この調査はやはり文部省の科学試験研究費補助金の交付を受けて、統計数理研究所と共同で実施されたものである。

この調査は、以下の調査群からなっている。

A. 言語調査

- ①共通語化の調査（どれほど共通語が話されているか）
- ②言語生活の24時間調査（個人の一日の言語生活はどんなものか）
- ③庄内方言の調査（庄内地方でどのような方言が行われているか）

B. パーソナリティの調査（共通語化に心理的条件がどのように影響しているか）

C. マス・コミュニケーションの調査（鶴岡市民が放送、新聞で伝えられるものをどれほど理解し、利用しているか）

D. 学校における共通語指導状態の調査

ちなみに、1950年暮れから翌年3月にかけて、白河・鶴岡の両調査結果との比較を目的とした、信濃教育会教育研究所が主体となり、国語研と統計数理研究所の協力による「長野県飯田市および上久堅村における言語生活調査」が実施されている。なお、ここでの調査は、①24時間調査・特定場面調査、②共通語化調査、および③話す技術の調査、の3種であった。

2. 2. 第2次調査の背景

第2次調査は、「社会変化と言語生活の変容」という課題名で、文部省科学研究費試験研究費の交付を受けて行われたものである。

国語研報告52（『地域社会の言語生活——鶴岡における20年前との比較』，秀英出版，1974）の「目的と意義」より，この調査研究の企画趣旨を引用しておく。

近年人口動態の活発化により，人口の，地方における過疎化，および都市周辺における過密化の現象がいちじるしい。国語の分野でもこのような社会の変化によっていちじるしい影響を受けているはずである。社会の変化に応じた国語の変化に関する研究については今までに見るべきものがないようである。この研究は，国立国語研究所と統計数理研究所との試験研究費による共同研究として実施した，白河市・鶴岡市での共通語化調査の実施後約20年になるのを契機に，それとの比較によって，この問題に迫っていかうとするものである。

なお，上記の課題名での補助金は1971・72年度の両年度にわたり受けており，71年度に共通語化を中心とする第2次鶴岡調査，翌72年度には愛知県岡崎市にける敬語および敬語意識に関する調査の2次調査が行われている。

2. 3. 第3次調査の背景

第3次調査は，第2次調査からさらに20年を経た1991年度から2年間おこなわれた。調査費用は，やはり文部省科学研究費総合研究（A）の補助金によっている（課題名「地域社会の言語生活——鶴岡市における戦後の変化」）。

この研究の成果の一端が，国語研報告109-1『鶴岡方言の記述的研究——第3次鶴岡調査報告1』（秀英出版，1994）である。これは，第3次調査における「方言記述班」によってまとめられたものである。なお，社会調査型の共通語化調査およびそれに関する検証・補完調査については，現在集計作業中である。いずれ近いうちに発表する予定である。

なお，第3次調査では共通語化という枠組みだけではなく，現在急速に進展しつつある日本社会の情報化・国際化などの社会状況の変化をにらみつつ，将来の日本語および日本人の言語生活の変容の状況を観察するための「定点的言語状況調査」への発展を意図している。